

船井情報科学振興財団 留学生レポート

2018年6月
下 英恵

University of CambridgeのDepartment of Biochemistry/Gurdon Instituteに在籍中の下です。現在ワールドカップシーズンのため、街中のパブは毎日賑わっており、研究所もカフェテリア内で全試合を流したりsweepstake（くじ引きで応援するチームを決めて、勝者が全ての賞金を得る賭け）を開催したりで、イギリス国内はお祭りムードです。本報告書では博士課程4年目後半の様子について報告させていただきます。

研究生活

ケンブリッジ大学の博士課程では、基本的に4年目の終わりまでに全員博士論文を提出しなければならないという決まりがあります。これを破ると、指導教官がその後博士学生をしばらく雇えなくなるなどのペナルティーがあるため、私も今年の9月末までの提出を目指して、現在博士論文執筆に取り組んでいます。実験は続けようと思えばいくらでも思いつくアイデアはありますが、書き上げに3~6ヶ月はかかることを考えて、私は4月から一旦実験をストップし、集中的に今あるデータを元に文章を書いています。

博士論文の書き上げはデータさえあればどこでも行えるので、皆様々な形式をとっています。周りのヨーロッパ人の多くは長期で実家や母国に戻って書いていますが、残念ながら日本は遠い上に誘惑も多いため、私はこの期間は週一だけラボに通い、それ以外はカレッジの図書館で過ごしています。はじめはラボに行かない新鮮さもあり、サラサラと作業が進んでいましたが、その後徐々に気分の浮き沈みが出てきて、現在も日々自分と戦っております。博士論文を書き始めてから、改めてPhDはマラソンのようだと感じるようになりました。「完走」に必要な距離は事前に決まっており、それを意識しながら自身でスピードやペースを調整していけば良いのですが、その中でどう自分のモチベーションを維持し続けるかが非常に重要になります。

またラボの近況ですが、この半年では指導教官が突然ラボをダウンサイズすることを発表するなど、様々なハプニングがありました。グラント終了間近の危機感や、次の研究資金獲得に関する不確実性などは、大きなラボ出身の私としてはこれまであまり経験したことがなかったので、改めてアカデミアの厳しさを感じさせられました。その他にも、ジャーナル投稿用に自分のこれまでの研究をまとめた論文を、博論と並行して書いていたのですが、指導教官の意向でその内容も二転三転して、最終的には他のメンバーとの合同論文に変わるなど、あまり物事が思い通りに進まない数ヶ月でした。しかし同期の博士学生と飲みに行くと、皆同じような苦戦を経験している様子だったので、あまり悩まず前向きに、変化があっても臨機応変に対応していきたいです。

日常生活

最近の研究以外の時間は、主に就職活動にあてています。就活をはじめのタイミングですが、博士論文提出の約半年前くらいがベストと聞いていたので、3月頃からCVやLinkedInのプロフィールを整えたり、大学のCareers serviceのイベントに顔を出したり、nature jobsやindeedなどの公募を頻繁にチェックするようにしています。私の場合はまず選択肢を狭めず、場所はヨーロッパ・アメリカ・日本、職種もアカデミア（ポスドク）だけでなく、大手企業やスタートアップでのサイエンス職などに幅広く応募をしています。

幅広く就活をしていると、欧米と日本での就活事情の違いがたくさんみえてきます。一つは募集時期です。日本は新卒の場合、決まった募集・採用時期があるのに対し、欧米は締切日のないrolling applications型や職種に空きが出た時に公募をするのが主流です。従って、日本

への応募を考えている場合（海外学振などを含む）、卒業年度の3～6月が肝心な時期となります。欧米はよりフレキシブルですが、いつ仕事の募集ができるかわからないので、常にアンテナを張っていないと疲れます。

二つ目は学生に求めるものです。企業にもよりますが、日本のいわゆる新卒エントリーシートには受賞歴や職種に関連した経験・実績を記入する欄は特になく、それよりも会社への志望度や応募者の人柄を重視した、ポテンシャル採用方式をとっているように思えます。それに対し、欧米は実力重視で、専門知識や経験、功績にフォーカスを当てているように感じました。現に、自分が受けた日本企業の面接では「他にどのようなところを受けていますか?」「自分の短所・長所は?」という質問が多かったのですが、ヨーロッパの企業面接では「Tell us about your expertise」や「Can you tell us about this paper you wrote and your contribution?」などのことを聞かれました。もちろんだちらが正解ということはありませんが、日本はバックグラウンドがなくても社風にマッチしていて様々な仕事内容を任されても対応できそうな generalist を求め、欧米は入社後特に指導をしなくてもすぐに即戦力になってくれそうな specialist を求める傾向にあるのかなと感じました。

最後に、ビザを必要とするかしないかで、日本と欧米での採用のされやすさも異なってくると思います。欧米で就職がしたい場合、いくら海外の名門大学の博士号を持っていても、ビザ取得という難関と向き合わなければなりません。ポスドクの場合は受け入れ先が（期限付きの）ビザをスポンサーしてくれる場合が多いですが、企業やアカデミアでの staff scientist ポジションだと、やはり応募要項のところで「We do not provide sponsorship for this position」あるいは「[Country X] residents preferred」と書かれるケースもあります。特にヨーロッパではEU加盟国間はビザを必要としないので（※これは今後 Brexit でどうなるかわかりませんが……）同じくらいのレベルの応募者が複数いた場合、優先順位として、その国の人>EUの人>その他になるのでどうしても日本人は不利になります。一応イギリスには Tier 4 Doctorate Extension Scheme、アメリカには Optional practical training と呼ばれる、博士過程卒業後一年までは学生ビザの延長で就職・仕事探しを行えるようなのですが、長期的なことを考えるとビザのスポンサーは必須です。アメリカの就労ビザ(H1B)の場合はさらに数に限りがあり抽選形式と聞いているため、より取得が困難のようです。このように、試練の多い就職活動ですが、次の報告書で良い結果をお伝えできることを願っています。

最後に

博士課程のはじめの方は、早く時間が流れるといいなと思っていましたが、この最後の数ヶ月はあっという間に過ぎていき、もう少し時間が欲しいと思うことも多々あります。もう限られた時間しかないので、1日1日を大事に過ごしていきたいです。



(左) 夏の恒例行事 King College Choir による Singing on the River。卒業したらこの景色を見られるなくなるのが寂しいです。
(右) 大学時代の友人がイギリスに来たので、初めてストーンヘンジに行きました。ただの石の集まりでしたが、楽しかったです。